

真言各流聲明の比較研究——四智梵語について——

塚 越 秀 成

かつて、真言声明には、本相応院流、新相応院流、醍醐流、進流（大進上人流）があつたが、進流以外の流は現在まで伝えられることはなかった。進流は鎌倉期に大和中川から高野山（南山）に本拠を移し、以後、南山進流として今日まで伝わっている。

本稿で比較の対象としているのは、そういった古の流派についてではなく、今日伝承されている真言声明、つまり、高野山及び古義一般に伝わる南山進流の声明、智積院（智山）に伝わる声明、長谷寺（豊山）に伝わる声明の三つである。その中でも「四智梵語」に関して、それぞれの唱法に関することについて比較検討を試みる。

一、比較の方法

真言声明では、古来、各山ともに『魚山私鈔』或いは『魚山叢芥集』（以下『魚山』）などと呼ばれる共通

の教則本を用いてきた。ところが、長い年月、それぞれがそれぞれの場所で伝承される間に、実際の演唱に少しずつ違いが出てきてしまい、現在では、上記の諸山の声明は、微妙にあるいは大きく異なるものに変化してしまっている。その為、現在では実際に声明を唱える際に従来の『魚山』を用いることはほとんどなく、諸山ともそれぞれに工夫を凝らした比較的新しい教則本を用いることが多い。その類の本もいくつも出ているが、南山には『南山進流聲明類聚 附伽陀』、智山には『智山法要次第』、豊山には『^①仮博士所作付二箇法要法則』等が代表的である。

これらの本に共通していえることは、「仮譜」が記載されている点である。しかしこの「仮譜」は諸山の唱法に基づいて、それぞれにとって分かり易いように造られたものであるため、その書き方、規則等は一定ではない。また、必ずしも実際の音を忠実に再現しているものでもないので、単純に仮譜だけで比較することはできない。そこで今回は、先ず、ある一定の記譜法にて各師の演唱を採譜することにした。

現在では、各師の演唱をCDやカセットテープなどの形で聴くことができる。実際にそれを聴いて、演唱音を採譜した上で比較・考察を加える。

ここで用いる記譜法とは、現在の真言声明の譜で伝統的に使われている五音譜（五音博士）を基本として、五音だけでなく十二音のすべてを表現できるように工夫したものである。すなわち、右の音階表（図1）に則って、音の高さ（音程）を記譜するわけである。

この記譜法は絶対音を表すものではない。あくまでも声明の階名である宮・商・角・徵・羽に基づき、それを図に表すのである。絶対音を表すためには、曲を唱えた時の調子を記せばよいが、各師とも曲のはじめ

宮		
変宮		
嬰羽		
羽		
変羽		
徵		
変徵		
角		
呂角		
嬰商		
商		
変商		
宮		

図1

真言各流聲明の比較研究 (塚越)

から最後まで同じ調子で唱えていることは希で、曲の途中で次第にずれて、最終的に半音(一律)程度上下することが多いため、今回の採譜では絶対音については重きを置かない。

たとえ曲の始めの方の商の音と最後の方の商の音が半音、あるいはそれ以上ずれていたとしても、曲の流れの中で、その音が商であると判断できれば、同じ博士で記す。これによって、師によって出音の音程(すなわち調子)がまちまちであることに起因する比較のしづらさをも解消できるのである。

また、音の長さ(音価)についてはある程度博士の長さに反映させているつもりであるが、そもそも拍節を持たない曲であるため、必ずしも正確ではないことをお断りさせていただく。

なお岩原諦信師は、声明に使用される音は、宮・商・角・徵・羽・変徵・変宮・嬰羽・嬰商の九種と限定されているが、⁽²⁾ 実際問題としてそれ以外の音も使われているので、ここでは敢えて、変商・呂角・変羽の三つを加えて十二種としている。

実際に採譜したものは次の各師の演唱である。

南山進流

鈴木智辨師(一八七四―一九六七)、岩原諦信師(一八八三―一九六五)、児玉雪玄師(一八九三―一九六五)、玉島宥雅師、加藤宥雄師、稲葉義猛師

智山

瑜伽教如師(一八四七―一九二八)、青柳照運師、布施浄戒師(一九〇一―一九七二)、孤島了章師(一九〇七―一九八八)

豊山

青木融光師(一八九一―一九八五)、秋山秀典師(―一九五九)、中義乗師(一八九二―一九七七)、

高橋宥順師（一九〇四～一九九二）、権田快寿師（一九〇七～一九八六）、阿部快元師（一九一〇～一九九二）、中賢乗師（一九一九～）、石井聖巳師（一九二三～）

本稿では、これらすべての採譜したものの中から、必要な部分のみを抜粋した図を稿末に掲載する。なお図中に現れる伝統的な仮譜（仮博士）はそれぞれ、『南山進流 聲明類聚 附伽陀』（南山進流、以下『類聚』）、『智山法要次第』（智山、以下『法要次第』）、『仮博士所作付 二箇法要法則』（豊山、以下『二箇法則』）から、抜粋したものである。

二、智山と豊山の比較

全体を通して、基本的な音の動きはほぼ同じであるが、細かな装飾の方法が異なる。以下、特筆すべきと思われるものを列挙する。なお、智山と豊山の唱法は実は交錯している。つまり豊山の師でも、智山の諸師と同じ唱法を用いている部分もあり、必ずしも明確に智山／豊山と線を引くことはできない。これは、かつては今よりもずっと多く智豊両山の諸師の間に交流、あるいは師弟関係があったことに由縁するものと考えられる。

「俺」（図2参照）

智山諸師は概ね図2のAの唱法を用いている。「当ル」部分で、少々音が跳ね上がる。尚、始めの#の様な記号は、音程がはっきりしないほど低い音から、次第に高くしていくことを示す記号である。

Bは豊山の数名の師に見られる。『法要次第』の「当ル」や、『二箇法則』の「切心」に当たるものがない。Bに似ているが「切心」の部分弱く（音量を小さく）唱える師（豊山）もある。

Cも豊山に見られるもので、より本博士の博士の動き（商―角―商）に近いものといえる。

「唵」の字については、もともと唱え方のバリエーションが多いものの一つであろう。細かい点を述べれば、智山諸師も豊山諸師もすべて唱法が異なるといってもよいほどである。それでも、南山進流と比較してみれば、概ねどの師も似たような唱え方をしていることがわかる。つまり、低音からすくい上げるように発音する点、「ム」の仮名に合った後、もう一度下からすくい上げる点などは共通である。

なお図中に「瑜伽師」と記されている博士はもちろん瑜伽教如師のものである。これは他のABCの唱法とは著しく異なっているが、これについては後述する。

「ユリソリ（藤由）」（図3参照）

これもバリエーションが多いものの一つであるが概ね図3のようになる。

豊山では、商の音で発音し一つ大きく「ユリ」をして切る。信澄記『聲明指南抄』に「但シ初二片ユノ様ニ一ツスルハユノ取付也。」とあることから、ここではこれを「ユノ取付³」ということにする。智山では「ユノ取付」がなく、つまり切らずに一息で唱える。ちなみに南山では豊山と同様に一度切る。『類聚』には「ユリカケニテ切」という。

図中の博士の形の違いはユリの付け方の違いを示している。『法要次第』に「大ユ三小ユ四」と明示されている通りの差異があると思われるが、必ずしも、智山と豊山との違いとは言えない。豊山の中でも智山の諸師と同じようなユリを唱える師がおられる。

蘇麁の「蘇」および摩観の「摩」(図6参照)

智山.. 商―変商―商と滑らかに唱えて、引返。

豊山.. 嬰商―宮―商と滑らかに唱えて、突返。

『二箇法則』に「強ク出ス故ニ角ノ位マデソル」とある。豊山諸師は角まではあがらないが、先ず嬰商ほどまで音程をあげている。なお、引返と突返にそれほど著しい違いは見られない。

「三ユ合」(「曩」「噴」、図7参照)

智山.. 仮名に合ってから片ユ二つ。

豊山.. 片ユと片ユの間に仮名。

「諸ユ」(図8参照)

智山.. 「上がるユ」と「下がるユ」の組み合わせたもの。

豊山.. 「上がるユ」二つを組み合わせたもの。ただし、豊山でも智山諸師のように唱える伝えがある。

尚、この部分は、各山ともに、実唱音は商の音で始まるのが正しい。しかしここでは伝統的仮譜との対比をし易くするために、あえて徴の博士で始めるような譜を作成している。

「五ッ色」(図8参照)

智山のみにある唱法で、豊山にはない。「夜」の五ッ色の部分は豊山では「色」。「羯」の五ッ色の部分は「ユリソリ」。

縛日囉羯磨の「囉」（図8参照）

智山・商から二律（或いは一律）上へソル。

豊山・角から二律ソル。

ちなみに、南山は反らない。商の音のままである。

羯磨の「羯」（図10参照）

智山には初めの宮に色がある。

第二の宮の「ユ二」は、智山では滑らかでカドがない。豊山では直線的でカドがある。

「返シ」の表現が異なる。智山は商の音程で「五ツ色」。豊山は徴と角の音程で「ユリソリ」。

以上智山と豊山との相違点を見てきた。細かい事を挙げれば他にもあるが、ここに挙げた以外はほぼ共通である。

三、南山の特徴と智山・豊山との相違点

南山の特徴と、智山・豊山との相違点について、いくつか挙げてみる。

- 智山・豊山に比較して全体的に唱える速度が速い。
- 「律に高下あり、呂に高下なし」「徴角同」という口伝があるとおり、音程の変化が少ない。
- 「ユリソリ」の初めに、力強く下からすくい上げる動きがある。「ユ」にも少し強めに下からすくい上げ

る動きがある。(図3参照)

○「ユリソリ」(図3)の音程の変化は直線的で速い。智山・豊山は曲線的でゆったりしている。

○「ユ」は智山・豊山のものよりも、音の揺れる数が多い。「呂曲のユリ」は比較的短時間に三つ程ゆれる(図5参照)。この複数のゆれをまとめて「一ユ」としているのである。また「ユ」の最後で音が上昇した瞬間に少しの間をあけて次の音が続ける。この部分は智山・豊山では「片ユ二」、あるいは仮名に合う場合は「片三ユ合」になっている。古来「ユ」は現在の南山進流のように複数のゆれであったのだと考えられる。それが智山・豊山になって、そのゆれを一つ一つ記すようになり、現在のような差異が生まれたと推測できる。

○途中で仮名が変わる文字に「ユ」がある場合、博士の最後で仮名が変わる。智山・豊山という「三ユ合」のことであるが、図7の仮名の位置に注目されたい。

○智山・豊山という「返シ」にあたる部分は、南山では「モドリ」となっている(図6参照)。智山・豊山では著しく音量を下げて(裏声で)唱えるが、そのような傾向は見られない。「モドリ」も前後の音と同じように唱えている⁽⁴⁾。

○同じ音が続けるときに、一刹那の間を置くか(図6南山A)、音程を上げるかしてから(図6南山B)次の音を出すことが多い。音程を上げる唱法は智山・豊山というところの「片ユ」に聞こえる。

○「夜」(図8参照)

律の部分の徴につく「ユ」は、智山・豊山では「諸ユ二」になっている。南山では「律曲のユリ」といって「呂曲のユリ」とは区別している。いずれも律のユリの方が音のゆれる数が増えているという点について共通している。ただし南山ではその増え方が大きく、およそ七つほどにまでなる。ただし、諸

師によってゆれの数は異なる。また「徴角同」の口伝の通り、徴と角が同じ音程である。角が徴に引き上げられている。

○「磨」（図11参照）

南山は実際は商の音で唱えるが、元の譜が徴を中心としているので、図は徴で作成した。

さて「徴角同」の口伝によって、ここもすべての譜を同音で唱える。第一の徴は「呂曲のユリ」。南山ではここは呂であるという伝である。智山・豊山では『智山聲明大典』⁽⁵⁾（以下『大典』）以降の諸本に律と明記されている。岩原諦信師も律であるとの疑を呈している。

なお、第二の徴に「ユリ」がない。智山・豊山では「モロユニ」である。『明治魚山』から、第二の徴に「ス」と書かれるようになった。それ以前の『魚山』では「ユ」と記されてあった。（新義版の『魚山』では「ユニ」）

四、南山と智山・豊山の類似点

○呂の部分における角の博士は、各山とも商で唱える（「薩・藥・囉・観」図4参照）。

○角商角の博士、特に角から商に下がる譜について（「夜」図8参照）

智山・豊山は第一の角の音にイロをつけて最終的に徴の高さまで上げてから、商に下げる。南山は、第一の角の音を始めから徴の音で出し商に下げる。いずれも角から商ではなく、徴から商に下げている。これは角から商に下げること、つまり、角から一音半（三律）下げるといのが難しいために起こった現象である。徴にあげてしまえば、完全四度（五律）下げれば商の音になる。これならば自然に下げら

れる。このようなことから南山では「徵角同」という口伝が生まれ、智山・豊山では角に色をつけるようになった。ともに同じような手法をもって唱え難さを解消しているといえる。

○「羯」字について

潮弘憲師によれば、南山では伝は二つ。(図10、南山A、南山B)

しかし、もう一つ、どちらにも当てはまらない唱法がみられた(図10、南山A)。これはAの唱法の打ち付けの後を、宮に下げずに前と同じ音高(商)のまま唱えたことから、多少の変化が起こったものと考えられる。

Bの唱法は新義のものによく似ている。打ち付けの後に、初重の羽に下げるため聴いた印象は異なるが、これは「ユ」の表現方法が違ったためである。「ユ」を比較の対象に入れなければ、全体的な旋律はほぼ同じものとみなす事ができる。

五、全体的な旋律の流れの比較

次に、全体的な旋律の流れを比較してみたい。次頁の旋律骨格図は、旋律の細かな修飾をできる限り省略して、音の骨格のみを残した博士を書いたものである。そうすることで、全体的な旋律の流れが見えてくる。図の見方は一行ごとに、右から、漢字の詞章、本博士、南山の譜、智山・豊山の譜の順である。智山と豊山の骨格はまったく同じであるため一つにまとめた。

図を見ると、諸山とも前半部分は全く同じであることがわかる。細かい点では既に述べたような違いがあるが、骨格は同じなのである。第三行目の「達」、つまり呂から律に変わるところ辺りからようやく違いが出る

較べて音の動きが豊富であることが言える。また、角の音をしっかりと唱えているため、本博士の形により近いものとなっているのが判るであろう。

六、呂律の問題について

各山とも「麼」以下「那」の角までは律、「那」の商から再び呂と指定されている（各版『魚山』『聴書』⁽⁸⁾『大典』『大全』⁽⁹⁾『類聚』）。『三箇法則』には「那」に呂律の指定がないが、羯磨の「磨」に「已下又律」と指定されていることから、単に抜け落ちたものだと思われる。なお『法要次第』にはそもそも呂律の指定がない。

(一) 智山・豊山の場合

前項でも述べたが、智山や豊山の唱法では、「麼」以前の商とそれ以降の徴が同音である。ある意味移調しているともいえるが、声明理論の反音とは別のものである。

仮に初め一越調の呂の商で、つまり平調で出音したとすると、「麼」以降は徴が平調である調子、すなわち黄鐘調の律で唱えていることになる。これは『魚山』に説くところの、四種反音のいずれにもならない。また譜本上では「那」で呂に戻るようになっていたが、実際の唱法では元の調子に戻ることはない。したがって智山・豊山における「麼」以降の移調は本来の姿ではない。単に、反音を意識せずに唱えられる、より唱えやすい形に変化し、それが残ったものと考えられる。

考え方としては、前半の商の博士を徴に上げて（完全四度上）唱えていると考えると理解しやすい。

真言各流聲明の比較研究（塚越）

（二）南山の場合

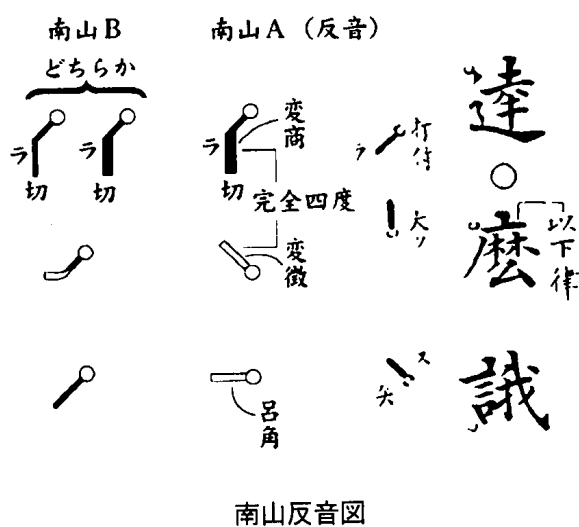
岩原諦信師著『南山進流 聲明の研究』（一九三二年版）巻末に収録されている五線譜、及び、岩原師に師事した吉田寛如師（一九二二）著『南山進流 詳解魚山叢芥集 洋音譜篇』に収録されている五線譜等を見るに、南山進流でも智山・豊山と同様に、「麼」以前の商と、それ以降の徴を同音に唱えているようである（下図南山B参照）。実際に各種の演唱を聴いてもそのように唱えていることが多い。

しかし、もう一つ別の伝があるようで、それが岩原諦信著作全集Ⅲ『南山進流声明五線譜』（二七頁）に収録されている。また、岩原師の録音されたものも、この五線譜に一致する。すなわち、「麼」から音高を上げて唱えている。具体的には、「麼」以前の商よりも、それ以降の徴の音が一音（二律）高い（下図南山A参照）。しかも、その後「那」の商にて、元の高さに戻っている。

今回採譜した6名の内、3名がそのように唱えている。ただしそのうち1名は音高の上げ幅が小さいが、いずれも確かに反音を意識した唱え方である。

さて、実際この移調が声明理論に即しているのだろうか。仮に一越調の商で、つまり平調で出音したとすると、「麼」以降の徴は平調より二律高い音、すなわち下無となる。すると、下無が徴となる調子、つまり盤渉調の律で唱えていることになる。これは声明の理論通りで、四種反音の中の「曲中反」である。

また、反音する「麼」の前の文字「達」には打付がある。打付はたとえば、商—宮と音を下げる唱法で、「羯」にも見られる。「麼」で反



音する場合は、必ず一律下の変商に下げている。実はこの反音の場合、「麼」の音は変徴になる。変商と変徴は完全四度という関係であることから、この「打付」は次に反音するための準備のためにつけられたものではないかと推測できる。

しかし、残念ながらこれらの演唱が本来的な反音であると認めることはできない。

新井弘順師は、論文「真言声明における反音曲の記譜法について」⁽¹⁰⁾や「豊山声明の「四智梵語讚」と「不動讚」⁽¹¹⁾などで反音の問題について扱っている。ここに後者の論文から引用する。

簡単にいうと、南山進流の「四智梵語」等の反音曲は、呂の部分が羽調反音により律に移しかえられ、曲全体が律曲化して記譜されている。それゆえ呂の宮が律の商となり、元の呂のユリがそのまま律の商に残されている。

つまり、現在の真言声明で使用されている本博士は、呂律の問題を意識せずにそのまま唱えられるように書き換えられたものだということである。つまり、本博士が示す高さそのままを唱えることが、本来的な唱え方になるということになる。となると、岩原師を始めとする南山諸師の呂律を意識した唱え方は、反音されている譜面を見ながら、さらにもう一度反音しているということになってしまう。

従ってこれが「四智梵語」本来の姿のままの反音であるとは言いきれない。

また、岩原師の反音を唱えるのは非常に難しい。それにとっても不自然な転調に感じる。現に実際に聴いた師の半分はこれを行っていない。その他、大勢で唱えている南山進流のいくつかのCDを聴いても、この反音を行っていない。この伝はあまり主流とは言えないのであろう。しかし、逆に考えれば、この伝が複数の師によって、音源資料として残されているのは、大変貴重なことだと思う。

七、瑜伽師の唱える「唵」について

瑜伽教如師の「唵」の唱法は、他に比べて明らかに異なる。これはなぜであろうか。

瑜伽師の演唱は音源のノイズが多くとても聞きとりづらいが、おおよそ次の通りである（上図左参照）。

（一）宮からなめらかに商まであげ、「ム」の仮名に合う。その後しばし声がノイズに隠れ、判別不能。

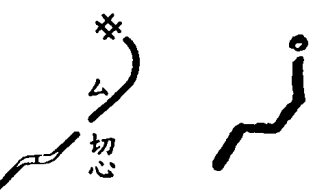
（二）商—嬰商—商と、なめらかに唱える。

この唱法について、瑜伽師は、

一云フ猶ホ初メニ宮ヲ足シテ宮商角商ト四折リニスル傳アリ（中略）扱テ此四博士ノ傳ハ（中略）謂ク少シ口ヲスボメテ喉ヨリムツクリト發音スル義ナリ、此時ハ宮商ノ處ヲカドナクシテムノ假名ハ商ノ處ニ自然ニ合フテ次ニ角ノ初メニ一當ツテ次ノ角商ヲカドナシムツクリトソツテ流スヘシ、⁽¹²⁾

と述べている。「角ノ初メニ一當ツテ」の部分が聞き取れないし、実際の演唱では角までは上がっていないが、

ほぼこの記述通りである。すなわち、瑜伽師は録音の際には、宮商角商の四博士（上図右参照）を用いたわけである。



この四博士は、『魚山』諸版に「根ニ宮ノ聲ヲモツ是庭上ノ用心也」とある通り、庭儀の時の庭讃として唱えるためのものであったが、智山で出された正徳元年版（一七一）に至って、「英長ノ義也。不爾。宣師云庭上ノ讃ノ時モヤハリ常ノ博士ニテ一位高ク出分也」と庭儀に於いて用いることはないことが記述されるようになった。これについて瑜伽師は、

野山ニ之ヲ註ノ如ク庭上ノ用心ト云々、新義ニハ常途ト庭上ト博士ニ於テ異リハナシ、

只音声ノ高下アルノミト伝フ⁽¹³⁾

と肯定しながらも、それでも四博士の伝があることを明らかにしている。現在豊山においてこの四博士の伝を聞くことがないのは誠に残念なことである。

なお南山進流にはこの四博士の伝も現存しており、今なお庭讃として使用されている。その唱法は、瑜伽師のものとは全く異なる。驚くばかりの迫力で唱えたかと思うと、「スカシ」と呼ばれる裏声を使った技法も用いられ、聞く者を圧倒させる。興味のある方は一聴されることをお勧めする。⁽¹⁴⁾

八、おわりに

以上、南山、智山、豊山の「四智梵語」を比較してみた。特徴的なことは記したつもりである。

まず、智山と豊山は細かな装飾音の違いだけであり、全体的な音の構成や流れは同じである。聴いた印象もあまり変わらないだろう。「四智梵語」に関する限り、大きな視野に立てば同じものといってもよい。

そしてその旋律は、ゆったりとして華やかである。長い伝承の中で旋律が博士に一致しない部分、あるいは伝承を失った部分も見られるが、呂律の問題を除けば、基本的な旋律はそれほど変化していないといえる。それに対して、南山進流は力強く、直線的で猛々しさを感じる。伝承の中で失ってしまった旋律が多いのが残念であるが、今日まで伝承されている曲数の多さは目を見張る。

また、一見まったく別だと思われた新義と古義の旋律とが、実は、骨格としてはよく似ていると言える。これは確かに各流の声明が師資相承によって繋がっているという証である。

今後は「四智梵語」だけでなく、他の曲についても比較検討を重ね、より多くの共通点、あるいは相違点

真言各流聲明の比較研究 (塚越)

を見つけ、さらにもっと広い見地から考察していきたい。

なお、私は智山と南山進流の声明については、実際に習った訳ではない。できればそれぞれ師について実際に生の声明を学びたいものである。

註

- (1) 豊山派の『二箇法要法則』は純粹な声明の教則本とはいえないが、事実上これを教則本として使っている。
- (2) 岩原諦信師著『増補校訂 声明の研究』二二九頁
- (3) 『続豊山全書』一七、三二三頁
- (4) 『増補校訂 声明の研究』二二三頁には、呂のモドリには音の強弱をつけるとあるが、実際にそのようには聞こえなかった。
- (5) 元は『新義声明大典』であったが、後に『智山声明大典』と改名。
- (6) 『増補校訂 声明の研究』三〇八頁
- (7) 潮弘憲師著『理趣三昧の解説』六二頁
- (8) 『声明聴書』一八八七年津守快栄師講演、一九〇一年早川快亮師校合了
- (9) 『豊山声明大全』一九二三年 近藤良空師著
- (10) 『東洋音楽研究』四八号一九八三年
- (11) 『豊山教学大会紀要』第一七号 一九八九年二七頁
- (12) 瑜伽教如師著『魚山精義』三二丁右
- (13) 同じく三二丁右
- (14) CD『高野山の声明く大曼荼羅供く』演唱…高野山声明の会(導師…稻葉義猛猊下)

今回採譜した各師の音源は以下の通り。

南山進流

鈴木智辨師『鈴木智辨声明大全』CD 12枚 鈴木智辨／加藤宥雄声明大全CD版刊行会
 岩原諦信師 岩原諦信著作集別巻カセット『南山進流声明集成』10巻 東方出版発行
 児玉雪玄師 児玉雪玄大僧正相伝『南山進流声明類聚』CD 20枚
 玉島宥雅師『南山進流声明要集』CD 30枚 大阪南山進流声明研修会発行
 加藤宥雄師『加藤宥雄声明大全』CD 14枚 鈴木智辨／加藤宥雄声明大全CD版刊行会
 稲葉義猛師『南山進流声明集成』CD 12枚 高野山真言宗青年教師会発行

智山

瑜伽教如師『瑜伽教如聲明遺音集』CD 2枚 うしお書店発行
 青柳照運師『智山聲明』CD 3枚 智積院発行
 布施浄戒師『布施浄戒聲明遺音集』CD 6枚 智積院発行
 孤島了章師『孤島了章声明遺音』CD 6枚

豊山

青木融光師『新義真言声明集成』CD 16枚 真言宗豊山派仏教青年会発行
 中 義乗師『聲明業の生涯』CD 4枚 中義乗声明集刊行会編集発行
 高橋宥順師『眞言聲明 大傳法院流傳法灌頂』CD 6枚
 権田快寿師『権田快寿聲明集』CD 1枚 真言宗豊山派越後仏教青年会発行
 阿部快元師『豊山二箇法要 附諸讀集』CD 4枚 真言宗豊山派江戸川仏教青年会制作
 石井聖巳師『石井聖巳聲明集』CD 5枚 不二会制作・発行

真言各流聲明の比較研究（塚越）

その他の音源については、新井弘順師所有のカセットテープより拝借。
【キーワード】 真言声明、豊山声明、智山声明、南山進流、四智梵語

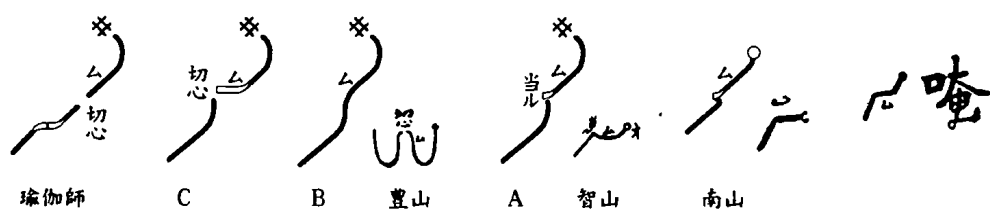


図 2

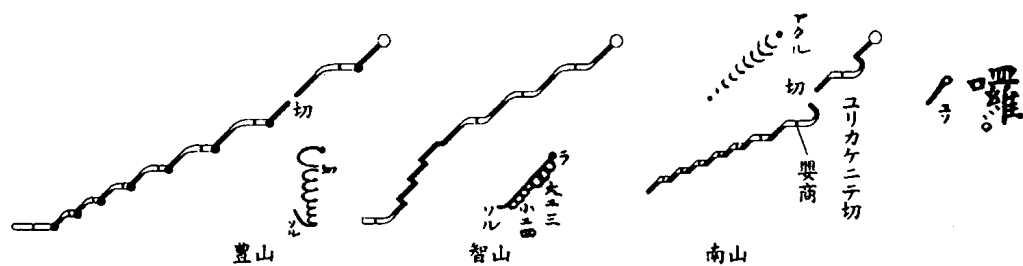


図 3

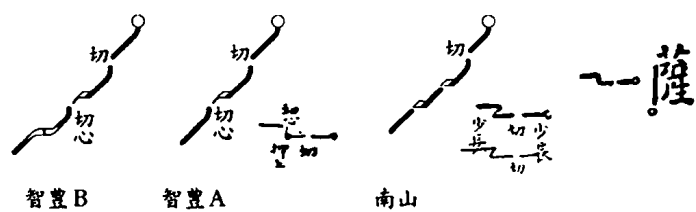


図 4

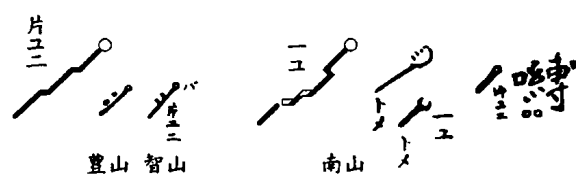


図 5

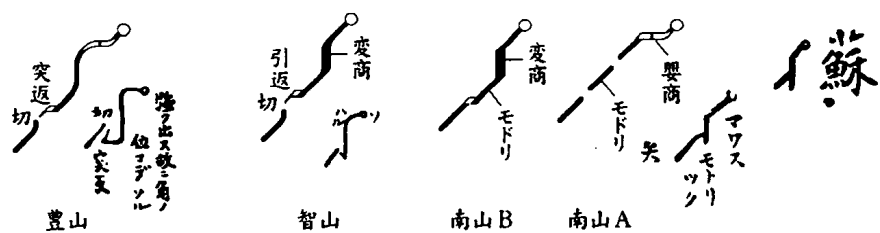


図 6

真言各流聲明の比較研究（塚越）

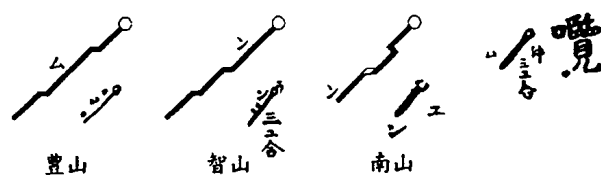


図7

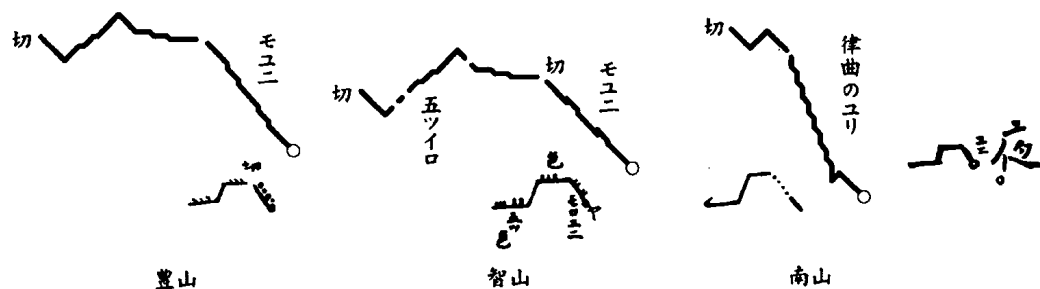


図8



図9

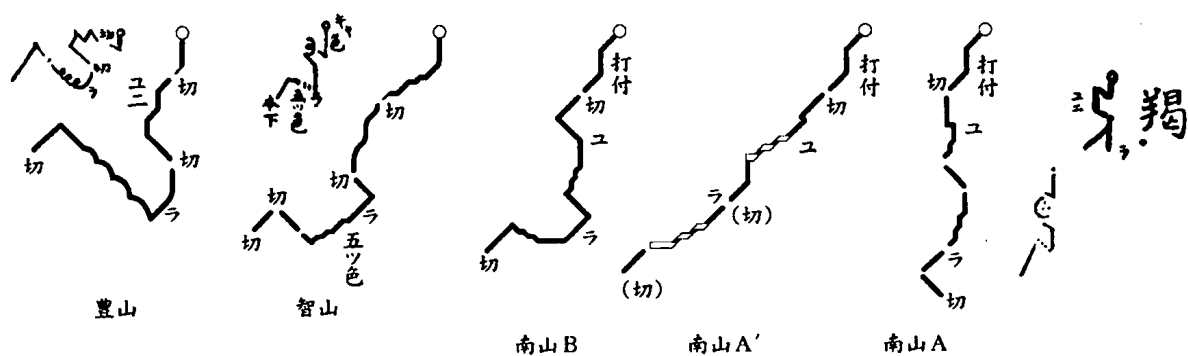


図10

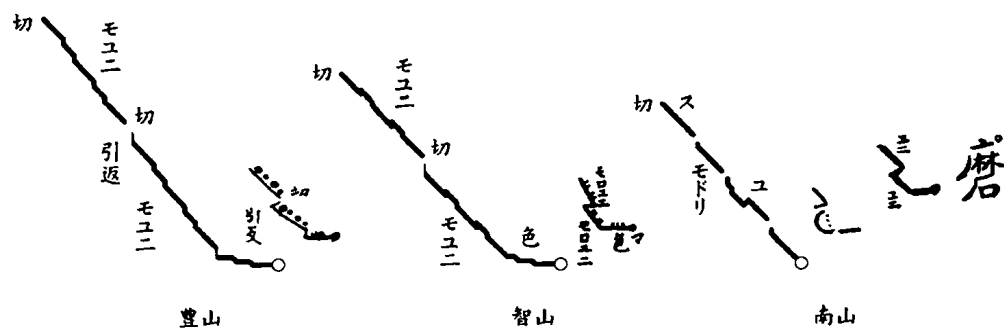


図11